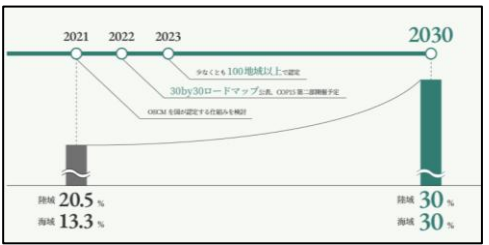


自然を守るというと「人は立ち入らず、自然をそのまま残すこと」がよいと思われがちです。原生林など保護が必要な自然もありますが、日本の里地里山に広がる林地や草地、湿地の多くは、草刈りや水管理といった人の営みによって維持されてきました。近年は管理の担い手が減り、こうした環境が失われつつあります。自然と共生するまちは実現には、人が自然に関わり、その恵みを受けながら適切に手入れを続ける必要があります。人と自然の関わりを取り戻すことが、生物多様性を守るための大切な一歩となります。



柏崎・夢の森公園 森づくり活動  
自然共生サイト認定 里山林エリア

## 柏崎・夢の森公園が認定された自然共生サイトとは？



生物多様性9つの価値のうち、以下の3つの価値が認定されました。

- ◆里地里山などの二次的自然環境に特徴的な生態系が存在する
- ◆在来種を中心とした健全な生態系が維持され、生態系サービスを提供している
- ◆希少な動植物種が生息・生育している

**認**定を受けたのは、広さ30haの園内の、里山林、草地、人工林・湿地、水田の4つのエリアで3.5ha（今後その他のエリアも追加申請予定）。里山林は積雪地帯特有の生態系が維持され、明るい落葉広葉樹林で構成されています。定期的な草刈りによる2次草原ではキキョウやオミナエシ、人工林・湿地はクロサンショウウオやモリアオガエルといった純絶滅危惧種、希少種の重要な生息地となっています。

日本の絶滅危惧種の約半数は、草地や湿地、里地里山など人との関わりの中で維持されてきた環境に生息していると言われてます。草刈りや水管理が行われなくなると、これらの環境が失われ、多くの希少なチョウやトンボ、野草が姿を消してしまいます。開発や土地利用の変化によって草地や湿地は全国的に減少しています。自然の中に入ると手が届くことで育まれてきた生物多様性が失われつつあるのです。私たちにできることもあるはず。みんなで考えていきましょう。



**自**然共生サイトは、市民や企業などによる取り組みによって自然を守りながら活かしていく場所のことで（2026年6月現在、全国で569か所が認定）、完成された自然を指すのではなく、人と自然がこれからも関わり続けていく意思を社会や未来に示すものです。この制度の背景には、世界中で生物多様性が急速に失われている現実があり、2030年までに陸と海の30%以上を健全な生態系として保全する目標が国際的に定められています。今、生物多様性の損失を食い止め、回復させる「ネイチャーポジティブ」の実現を目指した取り組みが世界で進められています。

夢の森公園では2007年の開園以来、様々な市民団体との協働により里山の保全活動を続け、手入れされた里山の自然の中で体験活動を行ってきました。近年はこのような市民によるボランティア活動の新たな担い手として地域の企業が参加するケースも増えています。地域全体の自然共生を実現するには、多様な主体（世代・分野）による多様な活動が不可欠です。自然との共生にただひとつの正解はありません。その地域にあった答えを、地域の人たちで見出していく必要があります。

## 柏崎市産材の活用及び普及啓発 柏崎地区「つなぐプロジェクト」



伐採跡地の森林ウォーキング

## 次世代へ柏崎地域の森林文化を継承する

**柏**崎地区「つなぐプロジェクト」は、新潟県の「森林・林業基本戦略」に基づき、令和4年度から始まった地域材活用と循環型林業の推進を目指す取り組みです。森林所有者、森林組合、製材業者、工務店、行政などが連携し、「山で木を育てる人」と「木を使う人」をつなぐことで、柏崎産木材の価値向上と地域経済の活性化を図っています。具体的には、森林内で住宅用材として適した木を選ぶ「選木研修」、伐採や丸太加工を学ぶ「伐倒・造材研修」を実施し、川上から川下までの関係者が現場で意見交換を行っています。また、太田材木店が開発したICタグ「OHTAG」を活用し、伐採木の生産履歴を追跡できる木材トレーサビリティの実証も進めています。市民向けには親子森林ウォーキングや木製ベンチづくり体験、木工ワークショップ、収穫祭での木育ブース出展などを行い、森林や木材への理解を深める機会を創出しています。さらに無花粉スギの植栽活動や、キッズマジックなどの公共施設への柏崎産材利用も進められており、森林資源を「伐る・使う・植える」の循環につなげながら、次世代へ地域の森林文化を継承することを目指しています。

## 最近話題の… 獣害問題と里山

**里**山は獣害問題とも大きな関係があります。人が薪を集め煮炊きしたり、落ち葉を集め堆肥をつくらしたり、田んぼや畑仕事のため水路やため池をつくるなど、かつて山（奥山）と人が暮らす場所の間には、里山という境界がありました。この「間」の空間があることで、野生動物と人の間に適度な距離が保たれていました。しかし私たちのライフスタイルの変化により、里山は手入れされなくなりました。その結果、人と野生動物の境界があいまいになり、野生動物が人の生活圏に出やすくなっています。獣害問題は野生動物が増えすぎたという理由だけでなく、人と自然の関わり方が変化したことによって生まれた側面があるのです。